

〔川崎医療福祉学会ニュース〕

川崎医療福祉学会 第12回研究集会

平成9年6月4日(水)

座長 山本 裕陸

研究発表

1. 遠隔講義の現状と川崎医療福祉大学のとりくみ

川崎医療福祉大学 医療情報学科 ※品川 佳満 竹内 晶子 村口 淳
 藤原 佳代 田中 昌昭 上田 智
 九州大学医学部附属病院 医療情報部 野瀬 善明 権丈 裕子

2. 在宅透析における自己管理支援システムの開発

川崎医療福祉大学 臨床栄養学科 ※平野 宏 荒木 裕子
 医療情報学科 格和 勝利 上田 智

座長 小島 晴洋

3. 離島医療におけるストレッチャー搬送の必要性とその現状について

—— 沖縄～与論間の航空機利用を中心として ——

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 ※近藤 功行

4. 特別養護老人ホームにおける死についての多角的検討 第1報

—— 岡山県の特養での死の実態 ——

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 ※宮原 伸二
 保健看護学科 人見 裕江
 臨床心理学科 進藤 貴子
 川崎医療短期大学 看護科 清田 玲子

※印：発表者

閉会挨拶 学会運営委員長 斎藤 泰一 教授

発表要旨

遠隔講義の現状と川崎医療福祉大学のとりくみ

川崎医療福祉大学 医療情報学科 品川 佳満 竹内 晶子 村口 淳
 藤原 佳代 田中 昌昭 上田 智
 九州大学医学部附属病院 医療情報部 野瀬 善明 権丈 裕子

平成9年4月19日医療情報学科ではインターネット及び学内LANを利用した遠隔講義を試みた。しかしながら現在の通信インフラではリアルタイムでの遠隔講義は不可能なため、使用する教材データをあらかじめ郵送してもらい、

それを学内のサーバに格納しての講義であった。このようにリアルタイムに行われる講義ではないので真の遠隔講義ではなかったものの学生の反応は良好であり、将来は衛星通信を利用した遠隔講義への期待が高まった。

在宅透析における自己管理支援システムの開発

川崎医療福祉大学 臨床栄養学科 平野 宏 荒木 裕子
医療情報学科 上田 智 格和 勝利

【目的】CAPD(持続的携帯型腹膜透析)患者のコンピュータを用いた在宅自己管理支援ソフトウェアを試作し、その有用性を検討した。

【方法】患者は自己管理ソフトを用いて、水分管理(水分摂取量/除水量)および溶質管理(蛋白質摂取量/透析量)を行った。一方、医療スタッフは臨床検査成績や理学的所見を入力した。必要時、相互の入力データは家庭電話回線およびインターネットで交信した。

【結果】透析効率および内容は図示された。検

査データ、身体測定値は在宅に送信された。外来受診時に相互の入力データが画面に表示され、患者指導内容が向上した。自己管理意識が向上し、透析効率と栄養状態が向上した。看護婦、医師とのチーム医療が可能となった。

【結論】本支援システムは自己管理能力を高めるのに有用であり、パソコンの普及により医療情報システムを活用した在宅透析自己管理援助法が確立されることが考えられる。

離島医療におけるストレッチャー搬送の必要性とその現状について

—— 沖縄～与論間の航空機利用を中心として ——

演者は与論島を中心とした琉球文化園で、死亡場所・終末行動など「死」の側面に関する調査研究を継続している。終末行動と受療行動の2側面を追う時、後者には救急搬送がある。自衛隊ヘリ・定期航空便による搬送(=ストレッチ

ャー搬送)など。演者も1度、ストレッチャー搬送の場に同行した経験がある。与論島での重篤患者の搬送先を調べると、搬送先の9.2割が沖縄。JTA(日本トランスオーシャン航空)よりの資料を交えて現状を報告。

特別養護老人ホームにおける死についての多角的検討 第1報

—— 岡山県の特養での死の実態 ——

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 宮原 伸二
保健看護学科 人見 裕江
臨床心理学科 進藤 貴子

川崎医療短期大学 看護科 清田 玲子

1995年度の岡山県内の特別養護老人ホーム(36施設)の入所者の死亡者数は352人であり、入所者定数に対して16%であった。そのうち施設内死亡が43%を占めていた。死亡疾患は肺炎、心疾患、老衰の順に多く、発病後24時間以内の突然死が17%に見られた。突然死は心疾患や肺炎

に多く、特に施設内にその傾向が強かった。83%の施設が特別養護老人ホームを死の場所と位置づけていたが、住民、家族、職員の意識の変化、環境づくり、医療の充実などを条件として挙げている。